

『木幡の時雨』を幸福に導く独自要素

——入水譚の視座から——

高 倉 実

はじめに

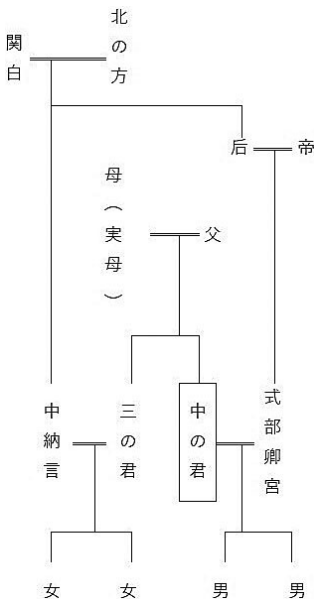
『木幡の時雨』は、全一卷の中世王朝物語である。成立年代・作者共に不明だが、作中の『源氏物語』（以下、『源氏』）撰取が、梗概書である『源氏小鏡』による理解と推定され、室町期の『源氏』享受の実態と合致する点⁽¹⁾、不遇な女性が幸福に至るといふ女性の理想を描いた内容である点から、現在は室町期成立の擬古物語から御伽草子への過渡的作品⁽¹⁾かつ、女房の手による創作との見方に落ち着いている⁽²⁾。

本作は、父親の死後、母と妹と共に暮らす中の君が、実母からの迫害や中納言とのすれ違いに苦悩し一時は入水を決意するも、姉妹交換によって幸福を掴み、最終的に一族の繁栄を成し遂げる物語である。

『中世王朝物語全集』において、「継子いじめの話型に従いながら、〈中略〉「はかなげな女君の悲恋の物語」を語」り、「後半生には女の幸せを獲得するという新傾向を示す⁽³⁾」と述べられている通り、『住吉物語』など先行作品から様々な要素・構想を撰取し、主題に沿って組み立て直した作品と言える。

本作の大きな特徴は、結末において登場人物全員が幸福を掴む点であり、主題に関しては、既に「女主人公の幸福と繁栄を最大限に物語」るものであるとの指摘がなされている⁽⁴⁾。安達敬子氏はこの主題において、『無名草子』の、「その人となき者の、身に余るばかりの幸ひを書きあらはさむとしたるもの」といふ『朝倉』評を引き、『木幡の時雨』との本質的な関連を指摘している。

【人物関係図一】



主題からして女性の願望を叶えるという執筆意図が窺え、作中の君本人が自発的に幸福を掴んでいく本作は、従来女性像の変貌を捉えるうえで注目され、先行研究も実子じめの構造や双生児の出産、姉妹の類似性描写と交換の展開など、中の君の家族間での問題に着目した論が多い。

しかし、主題を踏まえて作品全体を見直すとまだ考察の行き届いていない部分が見受けられ、特に入水場面は主題達成のために重要な働きを持つていながらもこれまであまり言及されておらず、更なる考察が必要と考える。

本稿は、『木幡の時雨』と他作品との比較を通して入水譚としての本作の独自性を検討し、「女主人公の幸福」という主題を踏まえたうえで、独自の要素がどのように幸福な結末を導き得たのか改めて検討していくものである。そして『木幡の時雨』独自の工夫を読み解くことで、作品の再評価を提案していきたい。

一 入水譚の系譜

まず、森下純昭氏と安道百合子氏の論を参考に『木幡の時雨』以前の入水譚の系譜を辿り、従来入水譚としての『木幡の時雨』がどの位置付けられてきたかを整理する。

入水のモチーフは上代から見られるが、物語としては『大和物語』に記載される「生田川」と「猿沢の池」が源となっていると言える。おおまかに展開を述べると、「生田川」は二人の男に挟まれた女性が片方を選ばずに死を選び、「猿沢の池」は帝への思慕が叶わずに死を選んでいる。

入水譚としては、まず「猿沢の池」型が発展し、一人の男性との

関係で想いが叶わずに入水に至る女君が描かれる。その後『源氏』「浮舟」巻で「生田川」型が改めて物語に摂取され、薫と匂宮という二人の男性の間で揺れる浮舟が、悩んだ末に宇治川に入水する展開が描かれていく。

貴公子二人の間で揺れる女君という構想に強い影響を受けた作品に『朝倉』が挙げられる。

『朝倉』は、「浮舟」をうけて即座に創作された作品と考えられる平安後期の散逸物語であり、残存和歌から内容の推定がなされている。作者については、『更級日記』の藤原定家筆本の奥書に

ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめ日記也。博のとの、は、うへのめひ也。よはのねざめ・みつのはま、つ・みづからくゆる・あさくらなどは、この日記の人のつくられたとぞ。

といった記述がある。内容に関して詳細は未だ不明な箇所も多いが、樋口芳麻呂氏の推測資料を参考に梗概を捉えると、女主人公が不在の父親を偲んで暮らす冒頭、男君が関白の息子であり恋敵が式部卿宮である設定、女君が素性を知らせず失踪する展開、男君に北の方がある点、石山が舞台に登場する点、女君が式部卿宮との子を懐妊する点、二人の男の間で悩み入水する展開や、その後助かり宮中で再会すること、親子ともども榮華を掴み再会を果たす結末部などが確認でき、およそ『木幡の時雨』と大きく重なる構想であることが分かる。なにより、冒頭で述べた通り主題の一致という点で『木幡の時雨』への影響は確実であろう。

樋口氏は『朝倉』の入水について、

薫大将が浮舟を宇治に隠し据えたように、三位中将―薫のな人物である―に白河に忍び住ませられ、匂宮的な人物とおぼしい式部卿宮と山里で契り結び、さらには入水し助けられる朝倉君は、浮舟に似た恋を体験しており、『更級日記』中で浮舟の女君に心を寄せ、夢みている孝標女の記述と符合するのである。

と述べ、さらに「浮舟的な恋をし、しかも明石君に似て皇后宮にまで昇る娘を持ち、誠実な男主人公との間には若君と姫君をもうけ、幸福な結末に終る」と評し、作者に菅原孝標女の可能性があることから、『源氏』の影響の強さを指摘している。⁶⁷

『木幡の時雨』の構想と、物語後半部の幸福獲得に強い影響を与えた『朝倉』だが、『朝倉』での入水は『源氏』「浮舟」から、幸福獲得は『源氏』「明石」からの発想によるものと考えられるのである。『朝倉』の後、『狭衣物語』（以降、『狭衣』）では主人公である狭衣大将が前半に出会う飛鳥井の姫君との物語において入水譚の話型が取り込まれている。

両親が不在で乳母や女房と共に暮らす飛鳥井の姫君は、狭衣と契りを結ぶも、身分の差を気にして想いを告げられないうちに乳母の策略により攫われてしまう。その後船上にて、自分を攫った男が想い人である狭衣の乳母子にあたる人物であったと知り、逃れるため懐妊したまま入水を選ぶ。狭衣は入水を伝聞で知るも、再会しないうちに飛鳥井の姫君は死亡してしまふ。

飛鳥井の姫君が入水に至る描写に、以下の記述がある。

もし、命、心に叶はで長らへば、行く末に聞きさせたまひて、

さてこそあんなれ、と聞こえたてまつらんも、いま心憂かりな
んかし、なごて、たださし離れたる賤の男にてだにあらで、親
しく、よろづ聞き合せたまふべき、ゆかりにしもありけん、遠
きほどまで行き着きて、このありさまを見扱はれぬ前に、ただ
いかにしても死ぬるわざもがなと思へば、かくて、五日になれ
ぬれど、水などをだに取り寄せず。
(巻一・一四三頁)

この心情について、後藤祥子氏は

女の入水譚は古代から数多いが、貴種の相手に操を立てて、卑位の男から逃れようとする意識が文学化されたのは珍しいのではあるまいか。もつともこの場合、「操を立てて」という近世的言いはふさわしくなく（つまり倫理道德的な意味ではなく）、後で事実を知った恋する人から「あんな手合いを相手にする女だったか」と蔑まれたくない一心のなせるわざなのであった。（中略）命をかけて貞操を守ろうとする、行動する女の片鱗が見て取れる。

と述べる。⁶⁸ここでは、二人の男性の間にながらも一人の男性への想いを貫くための入水が描かれており、「生田川」型と「猿沢の池」型が合成した入水譚として大成しているのである。また、飛鳥井の姫君が苦悩を吐露しながらも自らの意志で死を選んだように、入水譚は当事者である女性を主体として、その悲嘆と決意が描かれる物語として変遷していった。

入水譚は『狭衣』において集約を見せ、以降の多くの作品にその影響が強く見られることから、安道氏は「中世王朝物語の入水譚は、圧倒的に、『狭衣物語』の飛鳥井女君の入水譚の影響下にある」と

述べ、『木幡の時雨』も『狭衣』以降の作品群という括りに位置していると言える。

二 従来の『木幡の時雨』

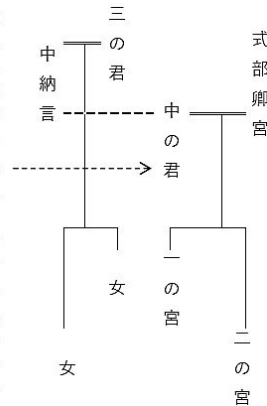
本作における入水譚の兆しは、中の君が出産を経た後に訪れる。式部卿宮との子を出産した後、周囲の勧めにより、中の君は子供や親しくしていた女房と別れ津に移動する。その際「いでや、世をひたすらに背き果てむ」とぞ思しなりぬる。」(四八頁)と既に将来への希望なども持っていない様子の中の君だが、そこで望まぬ結婚を強行されかけ、とんでもないと思うものの逃れる術もないため、ついに入水を決意する。

Aまことや、中納言の御乳母子に藏人の兵衛の佐といふ人、この津の守の所に、若き人(中の君)のつくづくとおはするとまねぶ人ありしかば、志ことに聞こえいでぬ。津の守の上も、よきことにこそとてかくの給へど、中の君は、「かけてもあるまじく、(藏人の兵衛の佐は、中納言の)よそ人にてさへあらず、宮たちの大人び給ひて、聞きあはせ給はんこと口惜しかるべし。ことにしもいとあるまじきこと(中略)(中の君は)いまはのがるべきやうもなし。ただ身をなきものにこそはなし果てめ」と思ひ取り給ひぬ。(五三頁)

津の女房達は自分らが都へ行くためと、藏人の兵衛の佐と中の君の間を取り持つことに積極的であり、この夕方にも話が進んでしまいうそである。このことのでかえって決意の固まった中の君は、その

日のうちに川に向かうも、川辺に座って泣いているうちに時間が過ぎていく。月が明るく中の君を照らすその日は、丁度七夕の夜であつた。

【人物関係図二】



B「ただ夕さり」などいふもいと心憂し。人知れず、さまざま申し乱れながら、なかなか一筋に思したちぬ。女郎花の生絹の単に袴ばかり着給ひて、歩みいで給ふ心のうちいとかなし。「宮たちの御行く末も、我さへ亡くなりなは、ただ人にてや果て給はし」と思すがいとかなし。

月は夕月にてはなやかにさしいでたるに、川端についぬ給ひて、岸うつ波に投げん身のさすがなれば、袖に顔をおし当てて、雫もよよと泣き給ふ。今宵はことに七月七日なれば、七夕の契りもかつは羨ましくて、

七夕の逢ふ瀬はよそになし果てて底の藻屑となるぞかなしきと思ひ続けて、月の傾くまで泣きおはするに……(五三頁)

Aの引用から中の君は、「よそ人にてさへあらず」、すなわち蔵人の兵衛の佐が中納言と関係の近い人物であることを一因として入水を決意していることが読み取れる。この入水理由は明らかに『狭衣』の撰取であり、「浮舟」に影響を受けた『朝倉』の入水とは異なる性質である。

また、Bにおける傍線部の表現も、安道氏が

入水に到る展開もさることながら、入水の覚悟が「単に袴ばかり」で「髪かきおこして」といった姫君の装いや姿態にあらわれている点や、「袖に顔をおしあてて」泣く仕草などは、明らかに『狭衣』の章句を引用していると思しい。七夕の逢瀬の連想は「源氏」以来の常套的表現ではあるが、姫君の歌は飛鳥井の姫君の歌をなぞって、いっそうの悲哀をそそる。いわば、『狭衣』ありきで生まれた物語であつたのであろう。

と指摘する通り、非常に類似した記述となつており、入水前の場面からは強く『狭衣』の影響が窺える。これを受けて安道氏は、「木幡の時雨」の『狭衣』取りは、模倣とすらされかねない忠実な踏襲におさまっている」といった見解を示しており、現状『木幡の時雨』はその評価から抜け出していない。

入水譚として分類すると、『朝倉』と本作はその心情も舞台も異なるため、入水場面における影響関係は強いとは言えない。先述したように、『朝倉』はむしろ結末部の一家繁栄や主題との関連であろう。そして見てきた通り、入水譚としては『狭衣』ありきで楽しまれた物語といった評価に繋がるのだが、ここで注意したいのは、『木幡の時雨』以前の入水譚の多くにおいて入水ははかなげな女君の悲恋の末路に位置しており、入水後は出家や死別に至ることが多

いという点である。

『狭衣』に描かれたような、成就しない恋のなかでせめてもの抵抗として自ら死を選ぶ姿勢は、誇り高い女性の姿や一途な思いを貫く健気な印象を与え、感動をもたらしものであつただろう。しかし、当事者の女君の立場になつて考えた時、入水することが彼女の幸せになると言えるのだろうか。そして、以上の特徴を持つ先行作品に対して、「女主人公の幸福と繁栄を最大限に物語」つていく『木幡の時雨』で描かれる入水譚は、影響下にあるとだけの評価では充分な認識とは言えないのだ。

三 『木幡の時雨』の独自性

『狭衣』と『朝倉』の影響を受けながらも、『木幡の時雨』にしか見られない特徴として、まず入水理由に中納言と式部卿宮が関係しない点がある。

前述の通り、『朝倉』は「源氏」「浮舟」を継いで二人の男性の間で悩んだ末の入水を描き、『狭衣』は女君が一人の男性への想いを貫くための入水を描いている。それに対し、先に引用した『木幡の時雨』本文を見ると、入水時、周囲に親しい女房などがおらず孤立無援であつた中の君は、求婚してきた蔵人の兵衛の佐が中納言の乳母子であること、子供に知られたくないことを挙げて入水に思いが及んでいる。つまり、この時点において中の君は中納言と式部卿宮という二人の男性の間にながらも、入水に至る理由は「浮舟」や『朝倉』に分類されるものではなく、極めて『狭衣』的理由であり、中納言と式部卿宮との関係は入水理由に全く関係していないのである。

【表】入水前の女君―男君の関係

		○	中納言	『木幡』
	○		式部卿宮	
○			蔵人の兵衛の佐	『狭衣』
	○	○	狭衣	
○			道成	『朝倉』
○	(○)	○	三位中将	
○	○		式部卿宮	

入水時の女君と男君の関係を次の表に示した。Aは女君にとつての想い人、Bは女君が子を儲ける相手、Cは女君が入水する理由となる人物である。

この表から、『木幡の時雨』が入水時理由を『狭衣』から撰取する一方、人物配置は『狭衣』からの変容を見ることが確認できよう。むしろこの形は、『朝倉』から女君に対して二人の男君が関係を持つ（AとBが別に存在する）という構図を撰取したうえで、そこに『狭衣』的入水理由となる新たな第三者（Cに当たる人物）を設けたものと解釈できる。

男君の役割を分けることで、主役となる男君二人は女君を苦しめる直接の加害者にならず、再会後スムーズに幸福への転換を図ることが可能となり、読者も素直にその再会を祝福できるようになるのだ。

さらに入水時の違いとして、表のBの通り女君はいずれかの男君と子を儲けるが、入水時『狭衣』『朝倉』では懐妊中であるのに対し、『木幡の時雨』では出産後の入水という差異がある。『狭衣』『朝倉』同様懐妊状態での入水の例に、『平家物語』巻第九「小宰相身投」が挙げられる¹¹⁾。そこでは、愛する夫を戦で失い入水への思いを語る小宰相に対し、乳母の女房が

されば御身一つのこととおぼしめすべからず。しづかに身々とならせ給ひてのち、をさなき人をもそだて参らせ、(中略)なき人の御菩提をもとぶらひ参らせ給へかし。(二四七頁)

と思ひ留まるよう説得する場面が描かれる。「御身一つのこととおぼしめすべからず」とあるように、妊娠状態での入水は禁忌であり、それにも関わらず入水することで激しい悲しみが表れていると言えよう。注釈には「夫の死を深く悲しみ、ついに身投げするが、身投げは他の遁世とは違った烈しさが認められる。」とあり、入水はそれほどまでの女君の激しさ、強い悲壮感を強調するものとして描かれていたことが分かる。

他作品に見られる入水時の状況や思い詰めた心情を踏まえて『木幡の時雨』に目を向けると、入水に至る中の君は少々軽々しくも受け取れる。逆に捉えると、『狭衣』以降多く語られていた女君の辛く苦しい入水譚に対し、反抗する姿勢を示したのが『木幡の時雨』であり出産後の入水であると解せよう。悲恋の物語の魅力は勿論あるものの、世の中に不遇な女君の物語が溢れるようになると、女性の立場としては同性の女主人公が苦しむばかりの展開に辟易してく

るものであろう。出産後の設定にすることで、従来の入水譚に描かれたような女君の深刻さを意識的に弱めたものと考ええる。

そしてもう一つ、『木幡の時雨』独自の展開に、入水直前に女君が男君本人に救出されるという趣向が挙げられる。

……(中の君が)月の傾くまで泣きおはするに、ここに舟にて漁する人なん舟さしのぼる。

「いとかたはらいいたしや。ここに落ちて入りて見捜されんといとつつまし」と思ひて、髪かきこして岩のはざまにかいそひておはするに、人しもこそあれ、中納言のつれづれの紛らはしに、漁させて見給ふなるべし、いとまばゆし。〈中略〉月の影さへ恥づかしきに、松明にて見捜されんこと、とつつましければ、おほめくもことわりなりや木幡山時雨の宿の仮りの契りは

との給ふ御声に、(中納言は)ふと心騒ぎして、御手をとらへて、木幡山時雨の宿の契りおきて幾歳濡らす袖の涙ぞ

との給ひつつ、御みづから御舟に抱き寄せ奉り給ひて、急ぎ急ぎ御宿へおはして、…… (五四頁)

入水を決意した中の君が、「月の傾くまで泣きおは」しているところ、唐突に「ここに舟にて漁する人なん舟さしのぼる」と舟が登場する。この舟こそ、「中納言のつれづれの紛らはしに、漁させて見給ふなる」舟なのであり、入水に臨もうとしたまさにその場所で感動の再会を果たした二人は、出会いを想起した和歌を詠み交わし、中納言が「御みづから御舟に抱き寄せ奉り給ひて」直接救出し、その後は行動を共にしていく。

従来の入水譚は、想い人にあたる男君は女君の入水を伝聞で知ることが多く、直接救出することはない。それだけでなく、ひどく思いつめた末に入水に臨んだ女君は、命が助かったとしても男君に会おうとはせず、入水後に男女が幸福な再会を迎えることはない。そういう従来の展開に対し、『木幡の時雨』は、入水の直前に男君から直接救出されるといふ新しい展開を描いた。

明確な『狭衣』引用は、読者に『狭衣』の内容を想起させ展開を予想させる働きがある。そしていざ入水直前という時、読者は女君の悲しい運命を想起するが、予想外の中納言の登場により登場人物たちはテンポ良く再会を迎え、物語は一気に幸福への転換を見せる。読者の予想を裏切り、使い古された展開からの脱却を図り、直接的な救出で女主人公を幸福に導いていく工夫だと指摘できる。

四 七夕という設定

入水場所での再会を果たした二人だが、その再会には重要な舞台装置が働いていた。『木幡の時雨』に描かれる入水譚の最も顕著な独自性として、七夕という場面設定がある。作中で七夕の記述があるのは中の君と中納言の再会前後となる二箇所である。

①今宵はことに七月七日なれば、七夕の契りもかつは羨ましくて、七夕の逢ふ瀬はよそになし果てて底の藻屑となるぞかなしきと思ひ続けて、月の傾くまで泣きおはするに…… (五四頁)

②「なほいとあさましきや。今宵はことに七月七日なれば、長生殿の言の葉によそえ、比翼・連理の契りをこそは」とよろこび

給ふこと限りなし。

(五十五頁)

①は入水前の中の君が悲しみを訴える場面、②は入水直後の中納言が喜びを表す発言である。一見して分かる通り、両者の「今宵はことに七月七日なれば」という文言は明らかに意図的な反復であり、同一の表現を用いながらも悲しみと嬉しさという真逆の働きをなしている。用法の違いには「今宵はことに七月七日なれば」の後に続く言葉が重要となる。

周知の通り七月七日は織姫と彦星が一年に一度だけ会える日であり、①にある「七夕の契り」とは、この再会の約束を示している。この約束を①の場面において中の君は「かつは羨まし」いものとして捉えており、同様の用例は他の文学作品にも多く見られる。中世の物語における登場例としては、『吾の衣』¹²があり、

七月七日にもなりぬれば、たえぬちぎりのほどもうらやましくて、
七夕のあふせを見てもかなしきはかぎりもしらぬ別なりけり

(二七二頁)

と記される。また、『建礼門院右京大夫集』¹³の「七夕群歌」では、多くは一年に一度しか会えない織姫と彦星への同情を詠んでいるが、

彦星の行き合ひの空をながめても待つこともなき我ぞかなしき

(二八二)

なにごともしも変りはてぬる世の中に契りたがはぬ星合の空

(二九三)

のように、彦星と織姫の逢瀬に対して恋人を待つこともない我が身を嘆く歌や、世の中は変わるが七夕の約束は変わらないと普遍さを詠む歌なども見られる。

これらの例から、「七夕の契り」は一年に一度は必ず会える確かな約束という認識があり、転じて、変わらない約束への羨望や会えない我が身への嘆きとして用いられていた常套句であることが理解できる。

それに対し再会後の②では、七月七日から『白氏文集』¹⁴「長恨歌」を導いている。次の引用の通り、「比翼・連理の契り」は七月七日に交わされた約束であるためだ。

七月七日、長生殿

夜半に人無く 私語せし時

天に在りては願わくは比翼の鳥と作り

地に在りては願わくは連理の枝と為らん

「比翼・連理の契り」もまた未来に続く愛を約束する文言として物語に頻出する常套句であるが、②におけるその働きは表面的に愛を誓うだけのものではない。ここでの引用によつて、物語内部において先ほどまで悲哀を演出していた七月七日という時期設定が、二人の未来を約束する舞台に変化しているのである。中の君が「今宵はことに」会えないことが悲しく会える約束が羨ましくと嘆く様子と、中納言が「今宵はことに」未永く共に過ぐす約束をしようと語る様子は、両者とも七夕という舞台と心情に沿う常套句を用いながらも、入水直前の絶望から再会の希望に物語を大きく転換させてい

るのだ。

七夕の効果はそれだけではない。七夕を詠む和歌は「その恋情のはげしさを訴えるものがほとんど」であり、さらに「ほとんどは彦星が舟で川を渡って逢いに行く様子が詠まれている」とされる¹⁵。実際、『万葉集』に「彦星し妻迎え舟漕ぎ出らし天の川原に霧の立てるは（巻第八・秋雑歌・一五二七）」とあるように、古くから七夕という歌語にこのような場面のイメージが付与されていたことが窺える。

注目したいのは、歌語のイメージと『木幡の時雨』の場面設定の関係である。この場面では中の君（織姫）が待つ川辺に中納言（彦星）が舟に乗ってやってくるのであり、構造が見事に重なるのだ。

以上を踏まえると、この場面での七月七日は常套句としての働きに留まらず、七夕という歌語から連想されるイメージと登場人物たちの状況の二重構造によって物語に奥行きを出す装置であったと言える。中の君にとって悲哀を演出していた七月七日という時期設定は、中納言との再会を経て二人の未来を約束する舞台に変化し、女君の悲壮の入水場所であった川も、男女の再会の地である天の川に見立て直されていく。七夕という設定の付与は天の川での逢瀬を想起させ、二人の再会が約束されたもののだとより一層感動的に演出する工夫として働いているのだ。

おわりに

以上、入水譚としての『木幡の時雨』の独自性を明らかにしてきた。本作は、「浮舟」的である『朝倉』の人物関係と『狭衣』の女君

の心情を摂取し、男君の役割を分けたことで、再会を素直に喜び受け入れられる入水譚となった。そして、出産後の入水と設定することで意識的に悲壮感を弱め、女君の不遇を控えめに留めていく。これらは、『狭衣』以降隆盛を見せた入水譚が、あまりにも女君にとつて不幸な展開が多く描かれていたためであろう。

従来の在り方に反発を見せながらも、『狭衣』の入水が読者層に共通認識として流布していることを利用し、『狭衣』の章句を明確に引用した後で男君との再会と直接の救出を描くことで、『狭衣』同様の顛末を想起した読者の予想を裏切りテンポ良く事態の好転を描きあげた。さらに、七夕という舞台設定を絡めることで物語に奥行きをもたらし、七夕を効果的に用いたことで入水直前の絶望から再会の喜びに物語は大きく転換していく。これらの独自性によって、本作は従来の入水譚の構造を摂取しながらも女主人公の不幸までは継承せず、意外性としての演出に変換し、従来から一歩進んだ新しい入水譚の姿を見せてくれているのだ。

『源氏』「浮舟」や『狭衣』の時点で入水譚は読者層に大いに受け入れられ流行しており、そこからの発展は全ての読者による希求とまではいかなかったかもしれない。しかし、『無名草子』¹⁶によると、『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎて世覚えはべれ。』のように『狭衣』自体には高い評価がなされている一方、飛鳥井の姫君に対しては「あはれも冷めて、口惜しき人の宿世なり。」「しばしの命だにありて、志のほどを見果てよかし。かたがた、いと口惜しき契りなりかし。』のように、愛の強さへの感銘より、短い命に対する残念さが述べられている。飛鳥井の姫君は自分を守るために行動できる新しい女性の姿であったが、行動した結果命を落とすことが「残念な運

命」と評価されてきたのも確かであり、読者の中から、女君を助け
て幸せにしたいという新たな創作への欲求が生まれるのは自然な流
れであろう。そのように感じた読者層のうちの一人が、『木幡の時
雨』の作者なのではないだろうか。

本作が「女主人公の幸福と繁栄を最大限に物語」るために中の君
と中納言の再会は必須であり、その再会場面を最大限効果的に盛り
上げる働きをなしたのが入水という趣向なのである。

本文の引用は、全て『中世王朝物語全集6 木幡の時雨・風につ
れなき』に依り、私に傍線や記号を付した。

注(1) 玉上琢彌「こはたの時雨論攷」(『国語国文』七・一九三七年一〇月)・

大槻修「物語『こわたの時雨』とどこどこ」(『甲南女子大学研究紀要』

二〇・一九八四年三月)・辛島正雄「中世物語史私注・『木幡の時雨』『源

氏小鏡』をめぐって」(『文献探究』二〇・一九八七年九月)

(2) 寺畑祐子「『木幡の時雨』における式部卿官像」(『松学舎大学人文

論叢』四三・一九九〇年一月)

(3) 大槻修・田淵福子・森下純昭校訂・訳『中世王朝物語全集6 木幡の時

雨 風につれなき』(笠間書院・一九九七年六月)

(4) 小木喬「鎌倉時代物語の研究」(有精堂出版・一九八四年六月)・安達

敬子「擬古物語と源氏物語―『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合―」(『源

氏物語研究集成第十四巻 源氏物語享受史』風間書房・二〇〇〇年六

月)

(5) 森下純昭「入水譚の系譜―狭衣物語を中心に―」(『中古文学』一〇・

一九七二年十一月)・安道百合子「中世王朝物語における『底の水層』

表現の検討―入水譚の変容をたどりつ―」(『国語の研究』四四・二〇

一九年三月)

(6) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房・一九八

二年二月)

同論を参考に『朝倉』を私的に要約し、梗概を以下のように捉える。

父が出家して行方知れずになり、女主人公の朝倉君は父を偲んで暮ら
している。おそらく偶然のことで朝倉君と三位の中将が出会い、契るも、
中将は朝倉君の素性を知らないままである。その後中将は朝倉君を引き
取り白河に住ませる。しかし、中将の北の方である堀河殿からの脅迫
(くもどという単位の男を用いる)を受け、朝倉君は里帰りをする。道
中中将の牛車とすれ違うが、中将は気付かず、白河に戻った中将は朝倉
君の行方不明を嘆く。

中将の元から去った朝倉君は、式部卿官と出会い契る。その後朝倉君
は陸奥へ下る途中の粟津に滞在し、父を想って嘆く。朝倉君は式部卿官
との子を懐妊したまま粟津の浜辺で琵琶湖に投身し、後にその入水を伝
聞した中将は石山寺に参詣する。何者かに救助された朝倉君は出産を迎
え、丁度中将と同じタイミングで石山寺に参籠。その際中将に気付くも、
会おうとはしない。

式部卿官と朝倉君は歌の贈答が続いており、生まれた子(姫君)は都
へ迎え入れることになる。この頃堀河殿がくもでの子を生み中将に疎ま
れる場面が挟まる。しばらくして朝倉君も姫君の縁で皇太后宮に出仕し、
宮中で中将と再会する。無事に結ばれた後、中将との子(男君)も出産。
皇后宮となった姫君から贈物、懐旧の贈答歌を賜り、一族は栄華を遂げ
る。

入水前後の和歌は『風葉和歌集』掲載の以下二首があり、傍線部に『更
級日記』・『源氏』との影響関係が指摘される。

◎みちのくに、くだらんとてあはづといふ所にとまりて侍けるに、水うみのおもてに月のいみじうあかきを見て、思ひいづることおほくて

あさくらの皇太后宮大納言

しらかしおきよりをちにかけはなれみし有明の月をこふとは

(巻八・羈旅・五七三)

◎あはれと思ひける女の、あはづのはまのほとりにて身をなげにけりと聞て、石山にまうで侍りけるに、うちいでるほどすぐとてよみはべりける

あさくらの関白

恋わびぬ我もなきさに身をすて、同じもくづと成やしなまし

(巻十四・恋四・一〇四七)

(7) (6)に同じ

(8) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『新編日本古典文学全集29 狭衣物語』(小学館・一九九九年)

(9) (5)安道氏論に同じ

(10) (9)に同じ

(11) 市古貞次『新編日本古典文学全集46 平家物語』(小学館・一九九九年)

(12) 今井源衛『中世王朝物語全集7 苔の衣』(笠間書院・一九九六年)

(13) 久保田淳『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館・一九九九年)

(14) 内田泉之助『白氏文集』(明徳出版社・一九六八年)

(15) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店・一九九五年)

(16) 樋口芳麻呂・久保木哲夫校注・訳『新編日本古典文学全集40 松浦宮物語・無名草子』(小学館・一九九九年)

受贈雑誌(四)

實踐國文學

實踐國文學会

Japan Review

国際日本文化研究センター

斯道文庫論集

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

上越教育大学国語研究

上越教育大学国語教育学会

上智大学国文学科紀要

上智大学文学部国文学科

上智大学国文学論集

上智大学国文学会

昭和女子大学大学院日本文学紀

昭和女子大学

要

叙説

奈良女子大学日本アジア言語文学科

神女大国文

神戸女子大学国文学会

人文学報

東京都立大学人文学科科学研究科

成蹊国文

人文学報編集委員会

成城国文学

成蹊大学文学部日本文学科

成城国文学

成城国文学会

清心語文

成城大学大学院文学研究科

清心語文

ノートルダム清心女子大学日本

清心語文

語日本文学会

全国文学館協議会紀要

全国文学館協議会

専修国文

専修大学日本語日本文学文化学会

高岡市万葉歴史館紀要

高岡市万葉歴史館